The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	駅清掃についてのご理解を
Author(s)	田中, 幸太郎
Citation	makoto. 1977, 18, p. 6-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86188
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

駅清掃についてのご理解を

南海電鉄の電車内や駅の清掃（消毒）の仕事を、当協会が請負はしていただくようになって、もう二〇年が過ぎた。はじめの頃、難波駅の清掃には戸惑ったものであった。一日平均五〇〇列車が発着し、数十万人の人が乗り降りするので、汚れがひどいが、ただ作業効果をあげればいい、というだけではすまないからである。常に、多数の乗降客の邪魔になったり、迷惑や、不愉快なことのないよう、気を遣いながら効果をあげるには、電鉄側の手足となる心構えでないと、つとまらない。乗客の中には、難かしい人がいる。例えば、些細なことだが、作業員が清掃中、覚えもないのに「箒を当てられ靴の皮をむかれた」と、言いがかりをつけられたり、また、ゴミと一緒に「目に小石を入れられたので弁償しろ」と、小石と医師の診断書をもって強談されたり、その小石が、また他の駅で、同じ人の目に入ったり、笑い話のようなことが起る。このようなことは、当協会の立場だけなら、簡単に白黒をつけられるが、乗客相手では、木で鼻を括ったようなこともできないことが、間々ある。

そして作業の多くは、未だに人海作戦的な方法から抜け出せないきらいがある。あらゆる分野で、機械化が進んでいる近代社会にあって、如何にも非能率なことであるようだが、雑踏する乗客の間を、無闇に清掃機械を走らせることができないので、ふだんの見廻りは、時間帯によっては、箒片手に、ゴミを追いかけて歩く以外にない。それでも思うような動きができず、作業員が突き飛ばされ、怪我をすることがあるくらいだから、勢い、機械類の使用は、昼間は極く限られたものとなり、手のこむ終電後の深夜作業にしか動かせない状況である。そこで、つい乗客のマナーを喚起したくもなる。せめて、タバコの吸ガラは、吸ガラ入れへ捨ててほしい。新聞、週刊紙は備え付の箱に入れてもらえば、それだけでも、随分たすかる。これは無理なお願いでしょうか？。

いま、難波駅が改装され、コンコースやホームも新しく生れ変りつつあるが、コーラやジュース、牛乳をこぼしたり、また吐いた痰がこびりつき、新装が台無しになりがちである。特に、コンコースには、安全対策から表面がザラザラした石が使われているが、これに汚れが付着し浸み込むと、並大抵では落ちない。これを洗い落すため、深夜作業で一〇人の作業員が、四時間あまりの労力と洗滌機で、洗滌したあと、ワックスで仕上げて八〇〇㎡しか捗らない。このように手入をしても半月、保たない。特に、チューインガムには泣かされる。無雑作に捨てられ、多勢の人に踏み付けられたガムは、洗ったくらいではとれないので、一つ一つ丹念に、金属製のヘラ様のものでこさげる外、いまのところ方法がない。（当協会では目下ガム取り機の研究にとり組んでいる。）

以上のようなことは、ほんの一部乗客の無関心から起ることではある。

また、清掃業務に携っていると、電鉄工事がいかに大変で、金のかかることか、はた目にもよく判る。ホームや線路を作り替えるのに、一刻も電車を停められないので、二重にも三重にも工事をしなければならない。一般的な工事概念からは想像もできない。これに付随して、清掃もまた紆余曲折を免れない。難波駅の大改装が五十五年完成時には、輸送力の増強にそなえ駅、ホームは拡張され、エスカレーターだけでも二十数本もつき、将来は駅の上に高層ビルが、下には地下街が完備されるとのことである。折角、新しく立派なものができるのだから、清掃が行届かないようでは申訳ない。電鉄側のご指示を得、合理的機械化もはかって、乗客が気持ちよく電車を利用できるよう、清掃（消毒）業務を通じて清潔で一そう明るく住みよい環境づくりに、心を砕いているのである。

第三事業部　田中幸太郎

なんば駅北口（朝のラッシュ）

お知らせ

去る二月十四日開催の大阪府環境衛生大会において当協会池上正成理事、梶田稔第一事業部長の両名が多年環境衛生業務に従事した功により大阪府知事から表彰状を授与されました。

編集後記

★表紙の桃花の写真は、着本阪南所長の作品です。

★一陽来復今年も又衛生害虫等の活動開始の候となりました。住みよい環境造りのためこれが撲滅に精進いたしたく存じます。

（児玉）